# 医師の介護保険における「認知症」の取扱いについて

旭川市医師会
（吉野耳鼻咽喉科医院）　吉野　成一

認知症は、医療の分野でも介護の分野でも早期診断、早期治療を求めるべきですが、現在は、かなり混乱状態にあると思います。

介護保険の分野では、○○式認知症テスト、××式認知症テストとあり、これらのテストの結果、認知症であると判断していろいろの改善法に取り掛かるマニュアルができています。一部の方から「認知症」は医師法に基づいて医師が診断するルールが必要ではないかという意見があります。最も最近では精神科等でMRI SPECTの確認検査を必要とする前に、医師会レベルで研修組織を作り、希望するプライマリケアドクターで五感検査、各種のもの忘れスクリーニング検査で早期診断のための「もの忘れ外来」を開設、システムを作り、介護保険の範疇で医師が早期改善をまず行う態勢を作り、早期診断早期改善を勧めている動きがあります。

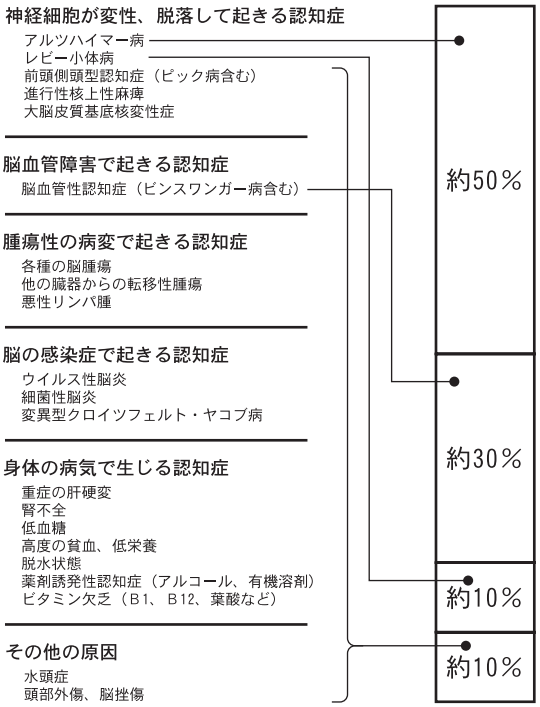
いずれにしても、認知症となれば1つの病気ではなく、図のようなさまざまな病気が「認知症」を引き起こしている訳で「認知症」は立派な病気であり、診断が必要になり、医師としてはその対応を指導していくプロセスを踏むべきです。

2月12日の日本ケアマネ協会全国大会において、介護保険の範疇で「認知症」の病名が医師の診断無しにケアマネの手で独自に取扱われていることの多さに驚きました。

例えば、全国のGHの多数が「認知症」対応として建てたにもかかわらず、医師の指導ゼロで利用者入所があったり、全国のデイサービスでも認知症といわれる利用者を取り扱っているのに、医師の診断がゼロであったりします。もちろん私は、今の早期診断早期改善がベストだという由因によると思います。そのために「認知症」の対応は、上述のプライマリケアドクターの初期診断、そして二次段階として精神科医の精密診断をベースに早期診断早期改善を始める態勢をとるよう、医師会、介護団体と十分な協議を行ってマニュアルを作るようにしていただきたい。

「認知症」として対応する以上はあくまでも医師の診断を受けることです。今医師会でも、精神科医師の診断でなくても第1線のプライマリケアドクターが、もの忘れ外来を利用して、問診して介護対応し、その中で行うのがベターであるという結論もあるようです。

大会の座長、会場の発言者etc.も、今旭川地区ケアマネ協会の「認知症もの忘れ外来」の五感検査およびスクリーニング検査を主とする方式を推進したいとの提案に賛同、励ましの言葉を多数いただきました。これらのお言葉を励みに頑張っていきたいと思います。ご協力、ご声援をよろしくお願いいたします。



# April

石狩医師会　御園生　潤

私の大学院生時代（昭和60年～平成元年）は、ちょうど、ＣＤ（コンパクトディスク）の登場期にあたり、この画期的商品の登場に、一枚3,000円～4,000円したいろいろなＣＤの発売日を心待ちにしていたころであった。ポータブルＣＤプレーヤーは登場前であり、ＣＤデッキからカセットテープへダビングしたものを全盛であったウォークマンを携行して楽しむといったスタイルが若者を中心に定着していた。毎年、この時期を迎えると、今もかわりなく、「春の曲」を特集したＪ－ＰＯＰ（邦楽のポップス）の番組が、民放（ＡＭ、ＦＭ局）で流されているが、稲垣潤一の「Ａｐｒｉｌ」や、惜しくも若くして逝った大塚博堂の「春は横顔」などは、番組にリスナーから度々リクエストされるものであり、「春のポップス」の代表的な名曲であることに今も昔も変わりはない。

今冬は、20年振りの豪雪となり多大な交通障害をもたらした昨冬が嘘のような冬の経過をみたが、札幌雪まつりが終ると真冬日から脱却して着実に融雪が進み、春への歩みを進める日々に、「長く厳しい冬の後だから、一層春の訪れが待たれ、うれしいのよ」と、絶妙の言葉を回診の折にはさむ病棟婦長の姿に、職員も患者もうなづきつつ、毎年、くり返されていることながら、ちょっと心おどるような4月の到来を待ち望んでいる。

○

この20年間を振り返ってみると、着実に病気を診る側にとっても、また治療を受ける側にとっても、「住みづらい」世の中になってきたことが、種々の事柄で痛感される。

今年も4月を迎え、月末には昨年の11月20日に黄色のクロッカスの球根を埋めた勤務先病院前の歩道には、「明るさを与えたい」という病院職員の切なる思いが黄色の絨毯となって現われ、通院患者と近隣住民らに癒しを与える。

必ずしも明るいニュースが少なくない昨今の日本を見るにつけ、加えて「医療受難」の暗い前途しかないように思えてならない、厳しい時代を見るにつけ、果たして今年度は一体どのような時代の推移となるのだろうかと春の訪れに際して想う。私の医学生時代には「医師免許があれば、どこへ行っても一生喰うには事欠かない」と教授クラスの先輩医師が講義で豪語していたものだが、時代も変わり、予想もしなかった厳しさが増強している昨今、こうした神話の崩壊を感じつつ、「世の中、非常に厳しいから身体をこわすとまず負けだよ」と前途ある卒後臨床研修の医師たちに語る日々である。


## 北海道医報ファイルについて

北海道医報を整理するためのファイル（新仕様-A4サイズ）が完成いたしました。医報本誌を1年分綴じることができます。ご希望の向きは下記まで送付先ならびに希望数をご連絡ください。無償にてお送りいたします。

記

**申込先**：北海道医師会事業第二課
〒060-8627　札幌市中央区大通西6丁目
Tel.011-231-1725　Fax.011-252-3233
E-mail　ihou@m.doui.jp